

令和5年度全国学力・学習状況調査 秋田県 調査結果の概要

～調査結果から見られた成果と 課題改善に向けた取組のポイント～

検証改善委員会では、教科調査及び質問紙調査の結果とそこから見られた課題を分析し、改善のポイントをまとめた資料として、本資料「調査結果の概要」を作成いたしました。

本資料を基に、本県において成果や課題が見られた項目について自校の結果と比較して分析するなど、各学校における検証改善サイクルの構築、更なる授業改善の取組の充実に御活用ください。



調査結果の概要① 国語

- ・ 小学校第6学年 国語
- ・ 中学校第3学年 国語
- ・ 検証改善委員からの提言 秋田大学教育文化学部講師 高橋 茉由 氏

調査結果の概要② 算数・数学

- ・ 小学校第6学年 算数
- ・ 中学校第3学年 数学
- ・ 検証改善委員長からの提言 秋田大学大学院教育学研究科教授 佐藤 学 氏

調査結果の概要③ 英語

- ・ 中学校第3学年 英語
- ・ 検証改善委員からの提言 秋田大学教育文化学部教授 佐々木 雅子 氏

調査結果の概要④ 質問紙調査

- ・ 主体的・対話的で深い学び
- ・ ICTを活用した学習状況
- ・ 検証改善委員長からの提言 秋田大学大学院教育学研究科教授 佐藤 学 氏

小学校第6学年 国語

◇平均正答率

()内の数値は全国比

	全体	学習指導要領の内容						問題形式		
		知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			選択式	短答式	記述式
		(1)	(2)	(3)	A	B	C			
全国	67.2	71.2	63.4		72.6	26.7	71.2	73.6	62.7	51.1
本県	72	74.4 (+3.2)	66.5 (+3.1)		80.1 (+7.5)	30.1 (+3.4)	76.6 (+5.4)	77.2 (+3.6)	67.6 (+4.9)	58.2 (+7.1)
自校										

(1)言語の特徴や使い方に関する事項 (2)情報の扱い方に関する事項 (3)我が国の言語文化に関する事項 A話すこと・聞くこと B書くこと C読むこと

概要

○平均正答率は、全ての問題で全国平均を上回っています。
○「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」の平均正答率は5ポイント以上、全国平均を上回っています。

小学校第6学年 国語 調査結果から見られた成果

◇設問ごとの顕著な例 [1四]

- 1 川村さんは、学校の田んぼで取り組んだ米作りについて文章を書こうとしています。次は、【川村さんの考え】と川村さんが選んだ【カード①】から【カード⑤】です。これらをよく読んで、あとの問いに答えましょう。
- ※【川村さんの考え】及び【カード】は略。実際の調査問題を参照してください。
- 四 川村さんは学習をふり返り、【川村さんの文章】の特徴をまとめています。その説明として最も適切なものを、次の1から4までのの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。
- 1 野菜作りなどくらべた米作りのよさをうそいせんしている。
- 2 調査方法についてよりよい手順を提案している。
- 3 調査で明らかになったことを整理して説明している。
- 4 予想される反論に対する自分の考えを主張している。

○成果

文章の種類とその特徴の理解についての問題

全国	79.8	本県	84.1 (+4.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例 [2二]

二 相田さんは、「資料1」と「資料2」を読んで分かったことをメモにまとめています。次の「相田さんのメモ」の「ア」に当てはまる内容として最も適切なものを、下の1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましよう。

【相田さんのメモ】

◇持久力を高める運動
たくさんさんの酸素を取り入れながら続ける
・軽いジョギング
・縄とび（続けてとぶ）

ア

1 ◇体のやわらかさを高める運動
しゅん間的に大きな力を出す
・ふっさん運動
・うで立てふせ

2 ◇体のやわらかさを高める運動
しゅん間的に大きな力を出す
・うで立てふせ
・縄とび（続けてとぶ）

3 ◇きん力を高める運動
しゅん間的に大きな力を出す
・ふっさん運動
・うで立てふせ

4 ◇きん力を高める運動
たくさんさんの酸素を取り入れながら続ける
・ふっさん運動
・うで立てふせ

2 相田さんの学級では、健康に過ごすために、複数の文章を選んで読み、自分ができそうなことを考えてまとめることにしました。次は、「相田さんの考え」と、相田さんが知りたいことを調べるために選んだ【資料1】、【資料2】です。これらをよく読んで、あとの問いに答えましよう。

※【相田さんの考え】と【資料1】、【資料2】は略。実際の調査問題を参照してください。

○ 成果				
目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付ける問題				
全国	67.4	本県	72.0 (+4.6)	自校

◇設問ごとの顕著な例 [3二]

二 谷さんは、寺田さんと山本さんの二人が、どのような思いでボランティアを続けているのかについて、分かったことを書くこと。

○「インタビューの様子」の、寺田さんと山本さんの発言の中から言葉や文を取り上げて書くこと。

○書き出しの言葉に続けて、四十文字以上、六十文字以内にまとめて書くこと。なお、書き出しの言葉は、字数にはふくまない。

はじめは、見守りボランティアの仕事は大変なことばかりだと思っていましたが、

40字	60字
-----	-----

3 谷さんの学級では、学校ボランティアの人たちを全校にしようかいするために、自分の相手を決めてインタビューすることになりました。次は、「谷さんの考え」と「インタビューの様子」です。これらをよく読んで、あとの問いに答えましよう。

※【谷さんの考え】と「インタビューの様子」は略。実際の調査問題を参照してください。

○ 成果				
目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる問題				
全国	70.2	本県	80.1 (+9.9)	自校

小学校第6学年 国語 質問紙調査の結果から

◇国語の学習に関連する質問における特色

〔児童質問紙(43)〕 「国語の勉強は好きか」

○肯定的な回答をした児童の割合

全国

61.5

本県

73.2
(+11.7)

自校

〔児童質問紙(49)〕 「国語の授業で、書いた文章の感想や意見を学級の友達と伝え合い、自分の文章のよいところを見付けているか」

○肯定的な回答をした児童の割合

全国

71.1

本県

79.0
(+7.9)

自校

〔学校質問紙(44)〕 「調査対象学年の児童に対する国語の授業において、前年度までに、互いの書いた文章に対する感想や意見を言い合い、自分の文章のよいところを見付けることができるような指導を行ったか」

○肯定的な回答をした学校の割合

全国

92.4

本県

93.8
(+1.4)

自校

〔児童質問紙(20)〕 「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をするか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」

●「30分以上」と回答した児童の割合

全国

37.3

本県

34.5
(-2.8)

自校

全国平均を下回っており、令和4年度の調査における同じ質問に対する児童の割合(35.9%)より1.4ポイント下回っています。また、「全くしない」と回答した児童の割合は22.3%（全国比-2.2）でした。

☆課題の改善と指導の充実に向けた取組のポイント

読書活動の充実を図るためには、日常的に読書に親しむ態度を育むとともに、読書が、必要な知識や情報を得たり自分の考えを広げたりすることに役立つことに気付かせるよう指導することが必要です。国語の授業においては、目的に応じて学校図書館を積極的に利活用し、必要な情報を得たり、書き手の多様なものの見方や考え方に触れたりする学習活動を充実させることが大切です。

中学校第3学年 国語

◇平均正答率

()内の数値は全国比

	全体	学習指導要領の内容						問題形式		
		知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			選択式	短答式	記述式
		(1)	(2)	(3)	A	B	C			
全国	69.8	67.5	63.4	74.7	82.2	63.2	63.7	73.1	65.6	68.0
本県	74	70.8 (+3.3)	66.3 (+2.9)	83.3 (+8.6)	86.4 (+4.2)	65.9 (+2.7)	68.4 (+4.7)	75.4 (+2.3)	71.6 (+6.0)	74.5 (+6.5)
自校										

(1)言語の特徴や使い方に関する事項 (2)情報の扱い方に関する事項 (3)我が国の言語文化に関する事項 A話すこと・聞くこと B書くこと C読むこと

概要

- 平均正答率は、全ての問題で全国平均を上回っています。
- 「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」の平均正答率は4ポイント以上、全国平均を上回っています。

中学校第3学年 国語 調査結果から見られた成果

◇設問ごとの顕著な例 [1四]

○ 成果					
聞き取ったことを基に、目的に沿って自分の考えをまとめる問題					
全国	82.5	本県	88.8 (+6.3)	自校	

四 「インタビューの様子」の [] で南さんは、インタビューを通して自分が考えた「社会で働く上で大切なこと」を星野さんに伝えてインタビューを終えようとしています。あなたなら、どのように話しますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

条件1 「インタビューの様子」から、星野さんの話を具体的にに取り上げて書くこと。
条件2 条件1で取り上げた内容を踏まえ、「社会で働く上で大切なこと」についてあなたが考えたことを書くこと。

※「インタビュの前の記事」、「インタビューの前に準備したメモ」、「インタビューの様子」は略。実際の調査問題を参照してください。

1 南さんは、総合的な学習の時間に、「社会で働く上で大切なこと」を考えたという学習に取り組んでいます。インタビュで情報を集めていた南さんは、電化製品を開発している星野さんの記事に興味をもち、会社を訪問して星野さんにインタビューをしました。次の「インタビュの前の記事」、「インタビューの前に準備したメモ」、「インタビューの様子」を読んで、あとの問いに答えなさい。

◇設問ごとの顕著な例 [2四]

2 中山さんは、本の読み方について考えるために、【A】と【B】の文章を読んでいます。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

※【A】と【B】、の文章は略。実際の調査問題を参照してください。

四 中山さんは、【A】や【B】の文章で述べられていることを参考にして、自分の本の読み方について考えました。あなたなら、これからどのように本を読みたいと考えますか。次のア、イについて、それぞれの指示にしたがって書きなさい。

- ア 【A】か【B】、またはその両方の文章から、自分が着目したところを抜き出しなさい。
- イ アを踏まえ、読書に関する経験や知識に触れながら、これからどのように本を読みたいかを具体的に書きなさい。

○ 成 果					
文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする問題					
全国	67.5	本県	76.5 (+9.0)	自校	

◇設問ごとの顕著な例 [4一]

4 石井さんは、国語の時間に、「竹取物語」を読みました。そのあと、学校図書館で、現代語で書かれた「竹取物語」を見付け、読み比べてみました。次は、【授業で読んだ「竹取物語」の一部】の〈原文〉とその〈現代語訳〉、【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

※【授業で読んだ「竹取物語の一部」】、【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】は略。実際の調査問題を参照してください。

一 〈原文〉の――線部「いひける」を現代仮名遣いに直し、全てひらがなで書きなさい。

○ 成 果					
歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読む問題					
全国	82.5	本県	94.0 (+11.5)	自校	

◇設問ごとの顕著な例 [3二]

▲ 課 題					
文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる問題					
漢字の字形や意味、用法などの知識を習得し、文脈に即して漢字を書くことに課題が見られます。					
全国	43.9	本県	48.8 (+4.9)	自校	

☆改善に向けた取組のポイント

漢字の指導においては、文脈に即して言葉の意味を捉え、漢字を書くことができるようにすることが大切です。同訓や同音の漢字については、文章の中ばかりではなく、「A 話すこと・聞くこと」の学習の中で、意味内容の伝達に混乱が生じやすいものに注意して、話したり聞いたりすることができるようにすることが必要です。

「おし量つて考える」

二 ——— 線部のひらがなを漢字に直し、楷書でいいねいに書きなさい。

※【下書きの一部】は略。実際の調査問題を参照してください。

3 山田さんは、国語の時間に、言葉に関して興味をもったことをレポートにまとめています。次は、山田さんが書いているレポートの【下書きの一部】です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

◇設問ごとの顕著な例 [4三]

▲ 課 題					
文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる問題					
文章について自分が感じたよさや工夫されていると考えたことなどを書くことはできているが、具体的な表現に着目できていない生徒が15.7%であり、自分の考えの根拠を明確にすることに課題が見られます。					
全国	50.0	本県	56.3 (+6.3)	自校	

☆改善に向けた取組のポイント

文章の構成や展開、表現の効果について考える際には、根拠を明確にして考えることができるように指導することが大切です。例えば、自分の考えを支える根拠となる叙述にサイドラインを引いたり、着目した表現を付箋に書き抜いたりしながら、文章中の叙述などと自分の考えとの関連性を整理する学習活動を行うことが考えられます。その際、中学校第1学年〔知識及び技能〕(2)イとの関連を図り、引用の仕方や出典の示し方などについて理解を深めることも大切です。

三 【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】は、古典の作品である「竹取物語」に、作家の星新一が工夫を加えて現代語で書いたものです。どこがどのように工夫されていると考えられますか。【授業で読んだ「竹取物語」の一部】や【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】の表現を取り上げて、あなたの考えを書きなさい。

※【授業で読んだ「竹取物語の一部」】、【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】は略。実際の調査問題を参照してください。

4 石井さんは、国語の時間に、「竹取物語」を読みました。そのあと、学校図書館で、現代語で書かれた「竹取物語」を見付け、読み比べてみました。次は、【授業で読んだ「竹取物語」の一部】の〈原文〉とその〈現代語訳〉、【学校図書館で見付けた「竹取物語」の一部】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

中学校第3学年 国語 質問紙調査の結果から

◇国語の学習に関連する質問における特色

〔生徒質問紙(47)〕「国語の勉強は好きか」

○肯定的な回答をした生徒の割合	全国	61.4	本県	74.0 (+12.6)	自校	
-----------------	----	------	----	-----------------	----	--

〔生徒質問紙(54)〕「国語の授業で、文学的な文章を読み、場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基にとらえているか」

○肯定的な回答をした生徒の割合	全国	77.2	本県	85.5 (+8.3)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

〔学校質問紙(43)〕「調査対象学年の生徒に対する国語の授業において、前年度までに、自分の考えを分かりやすく伝えるために、聞き手の立場に立って効果的な話し方を工夫する指導を行ったか」

○肯定的な回答をした学校の割合	全国	94.0	本県	96.3 (+2.3)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

〔生徒質問紙(20)〕「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をするか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」

●「30分以上」と回答した生徒の割合	全国	28.4	本県	32.3 (+3.9)	自校	
--------------------	----	------	----	----------------	----	--

令和4年度の調査における同じ質問に対する生徒の割合（34.0%）より1.7ポイント下回っています。また、「全くしない」と回答した生徒の割合は27.8%（全国比-9.0）でした。

☆課題の改善と指導の充実に向けた取組のポイント

読書活動の充実を図るためには、学校で作成する読書指導の全体計画の中に、読書の意義や効用を考えたり、読書を通して自分の考えを広げたりする学習活動を、計画的に位置付けることが効果的です。国語科の指導においては、小学校における指導との関連を図りながら、各学年の〔知識及び技能〕の読書に関する指導事項及び〔思考力、判断力、表現力等〕の「C読むこと」の指導を通して、生徒の読書意欲を高め、生徒が様々な文章を読んで、自分の表現に役立てられるようにすることが大切です。

1. 「国語」の調査結果の成果と秋田県の未来

今回の全国学力調査の国語では、これまでと同様にとっても良い結果を残しました。学校現場において教員の方々は、日々の様々な対応で忙しいと思いますが、そのなかでも国語力を身に付けるための指導が確実にできていることを本調査の結果が示しています。

筆者は、去年の3月に秋田県にきました。他県の教育現場の様子と比べてみても、秋田県はどの地域の学校でも落ち着いた環境で丁寧な指導が行われていること、教員の方々が国語力を付けようと責任を強くもって取り組まれていることは、秋田県の特に良い点として突出している部分であると感じます。このように着実に国語力を付けてきた実績があるからこそ、秋田県の未来を見据えて更に一歩前に進むことができると考えます。

秋田県の大きな課題として、人口流出や少子高齢化が挙げられます。今後、ますます人口が減り、少子高齢化が進んでいくなかで秋田県に住む人々は、どのようによりよい生き方を見付けていくのか。そしてその未来のために具体的にどのような行動を起こしていくのか。というように課題にどう向き合っていくのか、常に問われています。よりよく生きるためにどうしていくか・いきたいかと考えをつくるために、国語力は基盤となる大切なものです。大きな話に聞こえるかもしれませんが、秋田県の未来を見据えて国語科の授業でどんな国語力を付ける必要があるのか、教師一人一人が考え、教育を行うことが大切なことだと考えます。

今回は、「調査結果から見られた課題」に即して、秋田県の大きな課題に向き合う国語力としてどんな力が必要かについて二つの力を例に挙げて、更にその国語力を付けるための具体的な学習活動について以下で提案します。

2. 答えのない問いに他者と協働して向き合うための国語力を付けるために

小学校・中学校の結果でも、複数の根拠を示して自身の言葉で考えを述べる点に課題があることがわかりました。小学校の【1二】の問題では、川村さんが見付けた問題点を記述する際に、グラフ及びカードの双方から必要な情報を捉えて指定された字数に収まるように自身の言葉で書く必要があります。しかし、グラフもしくはカードのどちらか一方の情報からしか書けていない割合が多いことが結果からわかりました。ここから、二つ以上の複数の情報から自身の言葉でまとめるということができていない実態があると捉えられます。中学校の【4三】の問題では、表現の効果についての自身の考えは書けていますが、どの表現を根拠にしたのかについて記すことができていない割合が多いことが結果からわかりました。ここ

から、相手に伝わるように自身の考えの根拠となる部分を示すことができていない実態があると捉えられます。

小学校及び中学校で課題となったことは、どちらも他者と協働する際に必要となる国語力です。他者と協力しながら取り組む際には、他の人の意見や情報を捉えて自身の文脈に置き換えて理解することが必要です（小学校の結果ではここに課題がありました）。また、相手が理解できるように〈考え〉だけでなくどこから考えたのかという〈根拠〉も示す必要があります（中学校の結果ではここに課題がありました）。

以上を踏まえて、次のような学習活動を提案します。

答えが一つではないテーマや問いに対してみんなで話し合うという活動です。この時に重要なのは、話し合いの場において、根拠を必ず示しながら考えを相手に伝えること、そしてお互いに根拠を必ず確認し理解しながら、更に話し合いを進めていくことです。〈根拠〉と〈理由〉及び〈考え〉の関係性が妥当であれば、内容は多様で良いです。学級の話合いにおいて、その妥当性をみんなで吟味していくなかで、納得がいく考え（答え）を見付けていきます。

例えば、文学を読む際にきつと初読の感想で様々な疑問をもつことでしょうか。その疑問について、学級全員で話し合ってみるというような活動も良いでしょう。聞き手は、他の人の考えがどのような根拠や理由から述べられているのか、注意深く聞き理解しましょう。話し手は、一つだけでなく複数の根拠から、自身の考えを述べてみましょう。次に話す人は、これまで話された他の人の考えのどの点に納得したのかについても述べながら、自身の考えを述べていきましょう。このような活動を行うと、子どもたちは同じ根拠でも考えや理由が異なっていたり、同じ考えでも根拠が異なっていたりすることがわかります。子どもたちは様々な考えをもっていることが実感できます。

文学は一つの例です。他の領域でも行うことができます。また、教師は学習者の状況や発達段階に合わせて、根拠を複数提示することや自身の言葉をまとめる方法を使うことなど、条件を指定すると良いでしょう。この学習活動を大きな見通しから捉えたと、答えのない問いに他者と協働して取り組む力が付くと考えられます。

3. 日々の読書を続けて行い自身の世界観や視野を広げる国語力を付けるために

質問紙調査では、学校の授業時間以外で本を読む機会が少ないという結果が出ました。本を読むことは知識を付けるだけでなく、知らない世界について知ることや、日々の生活では触れられない領域について学ぶことができる機会を与えてくれます。子どもたちが今

後答えのない課題に向き合うためには、自身の興味関心に合わせて本を選び、読んだ内容を踏まえて考えを深めていく国語力を付けることはとても大切です。

そのためには、まず本を読むことはおもしろいことであり、自身の考えを深めるために必要なことだという実感を得ることが必要です。そのような実感があるからこそ、日々の学校の授業時間以外で好きな本を選ぼうとしたり、本を読み続けようとしたりすることにつながります。国語科の授業では、本を読むことはおもしろいことであり、自身の考えを深めるために必要なことだという基本的な体験ができるように、以下のような活動を行うことや学習環境を整えていくことを提案します。

（１）読み聞かせを行う

読み聞かせをしましょう。しかも教員の生の声で語って聞かせることが重要です。小学校でも中学校でも、読み聞かせを続けると、子どもたちに一体感が生まれ、語っている教員と子どもとの間につながりが生まれます。また、子どもたちが作品の世界に没入できるようになってきます。空いているちょっとした時間で継

続して読み聞かせを行うと良いでしょう。

（２）国語の単元に関連した本を期間限定で学級文庫（中学校の場合はコーナー）に置く

単元が始まる少し前（２週間前ぐらい）から、単元に関連した本を学校図書館や地域の図書館から複数借りて学級の本棚に置いておきましょう。司書教諭と協力して選書するのも良いでしょう。本を置いた場所には、紹介文の掲示をしたり、子どもたちが自由に記録できる記録表や、感想交流掲示板のようなものを置いたりして、本を更に読んでみたいと思う工夫をすると良いです。さらに、記録表からよく本を読んでいる学習者を紹介して、どのように読んでいるのか（読む方略）、いつ読んでいるのか（読む時間の確保）などについて尋ねて子どもに紹介してもらうことで、自分から進んで本を読むという読書力に意識を向けることも良いでしょう。

このように、自由な雰囲気の中で本を読める環境を整えていきます。では、どんな本を置いたらいいのでしょうか。以下の分類に合わせていくつか提示します。

【文学的文章の場合】

- ・授業で扱う教材の作者が書いた別の作品や同じシリーズの他の作品
例）「お手紙」…『ふたりはともだち』『ふたりは いっしょ』（アーノルド・ローベル）
- ・同じテーマの作品
例）「海の命」…命について
- ・同じ登場人物の作品
例）「ごんぎつね」…きつねが登場する作品

【説明的文章の場合】

- ・筆者が活躍している分野の本
例）「すがたをかえる大豆」
：大豆博士⇒植物関係について。
「アップとルーズで伝える」
：伝えることを生業にしている
⇒テレビ、新聞、ポスターなど伝える媒体について。
- ・同じテーマ…実験、乗り物、動物、仕事、など
- ・同じ論理…比較、順序だてて説明している、など

4. おわりに

筆者が挙げた国語力や具体的な学習活動は、たくさんあるなかの一つの例に過ぎません。日々、目の前の子どもたちと接している教員の方々にしか感じられないこと・捉えられないことが必ずあります。教員一人一人が子どもたちと向き合って感じたことを大切にしながら、自身や自身が接する子どもたちに合った学習活動を考え実践してみてください。今回の提案が、教員の方々の日々の実践に生きるヒントに少しでもなればと願っています。

小学校第6学年 算数

◇平均正答率

()内の数値は全国比

	全体	学習指導要領の領域				問題形式		
		A 数と計算	B 図形	C 変化と 関係	D データの 活用	選択式	短答式	記述式
全国	62.5	67.3	48.2	70.9	65.5	57.7	74.7	47.3
本県	65	69.1 (+1.8)	50.0 (+1.8)	71.7 (+0.8)	73.1 (+7.6)	60.7 (+3.0)	76.3 (+1.6)	50.9 (+3.6)
自校								

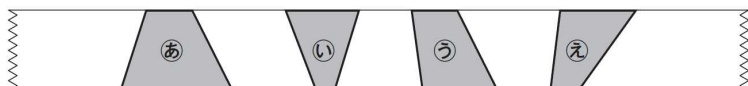
概要

- 「Dデータの活用」の領域において、7ポイント以上全国平均を上回っています。
- 「選択式」及び「記述式」の問題形式において、3ポイント以上全国平均を上回っています。
- 無解答率は、全ての問題で全国平均を下回っています。

小学校第6学年 算数 調査結果から見られた成果

◇設問ごとの顕著な例 [2(1)]【B図形】

(1) ゆいさんは、下のようにテープを直線で切って、㊐、㊑、㊒、㊓のような四角形をつくります。



㊐、㊑、㊒、㊓について、どのような四角形なのかを、次のようにまとめます。

㊐、㊑、㊒、㊓はどれも ① です。
 なぜなら、② だからです。

上の①にあてはまるものを、下の1から5までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。また、上の②にあてはまるものを、下の6から10までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。

- ①
- 1 長方形
 - 2 正方形
 - 3 台形
 - 4 平行四辺形
 - 5 ひし形

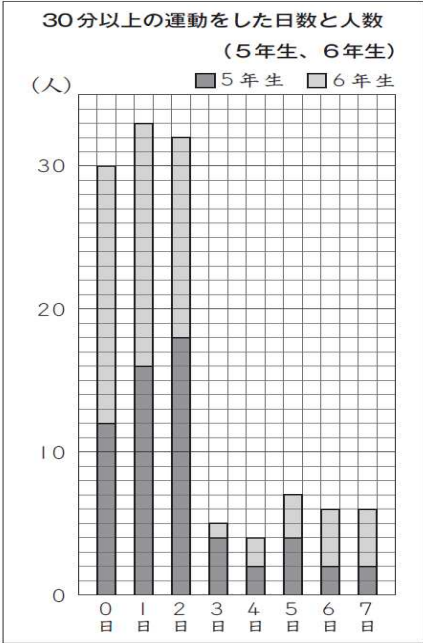
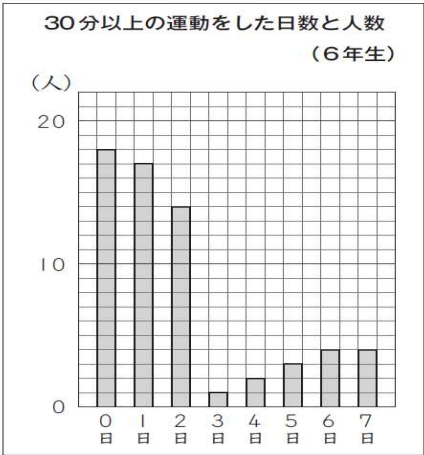
- ②
- 6 向かい合った2組の辺が平行な四角形
 - 7 向かい合った1組の辺が平行な四角形
 - 8 4つの辺の長さが等しい四角形
 - 9 向かい合った辺の長さが等しい四角形
 - 10 向かい合った角の大きさが等しい四角形

○ 成果

台形の意味や性質についての理解を確かめる問題

全国	59.8	本県	65.2 (+5.4)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例
 [4(3)]
 【Dデータの活用】



【「0日」についてまとめたこと】

「0日」に着目すると、次のようなことがわかります。

6年生のグラフでは「0日」の人数が1番目に多く、5年生と6年生を合わせたグラフでは「0日」の人数が3番目に多いです。

【「0日」についてまとめたこと】と同じように、「1日」に着目してまとめると、どのようになりますか。

下の□の中に、「6年生のグラフ」、「5年生と6年生を合わせたグラフ」、「番目」の3つの言葉と数を使って書きましょう。

○ 成果					
示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述する問題					
全国	56.2	本県	68.7 (+12.5)	自校	

◇設問ごとの顕著な例
 [4(4)]
 【Dデータの活用】

アンケート調査の結果 (人)

		30分以上の運動をした日数		合計
		2日以下	3日以上	
運動	好き	85	26	111
	あまり好きではない	10	2	12
合計		95	28	123

30分以上の運動をした日数が2日以下の人の中でも、運動が好きな人のほうが、あまり好きではない人より多いことは、左の表の中にあるどの数とどの数を見るとわかりますか。

下のアからエまでの中から1つ選んで、その記号を書きましょう。

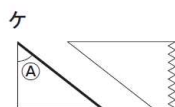
- ア 26と 2
- イ 85と 10
- ウ 85と 26
- エ 111と 12

○ 成果					
二次元の表から、条件に合う数を読み取る問題					
全国	64.6	本県	71.7 (+7.1)	自校	

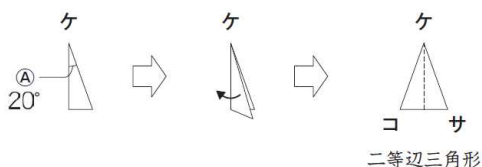
小学校第6学年 算数 調査結果から見られた課題

◇設問ごとの顕著な例 [2(3)]【B図形】

(3) 切って開いた三角形を正三角形にするには、㊸の角の大きさを何度にするべきですか。



わたしは、㊸の角の大きさを 20° にしました。切って開いた三角形ケコサは、二等辺三角形になりました。



私は、切って開いた三角形を正三角形にするために、㊸の角の大きさをゆいなさんとちがう大きさにして切りました。

▲ 課題

正三角形の意味や性質についての理解を確かめる問題

求める角が、テープを切って開く前の角であることに着目できていない誤答が見られました。

全国	24.9	本県	23.5 (-1.4)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

目的の図形をつくるための操作の見通しを立てられるようにすることが大切です。そのために、本設問のような活動を取り入れ、開く前の直角三角形の角と、開いてできた二等辺三角形の頂角の大きさの関係に気づき、操作の見通しを立てることができるようにすることが考えられます。

◇設問ごとの顕著な例 [3(4)]【A数と計算】

$$\begin{aligned}
 66 \div 3 &= (\underbrace{60 + 6}_{\text{あ}}) \div 3 \\
 &= \underbrace{60 \div 3}_{\text{い}} + \underbrace{6 \div 3}_{\text{う}} \\
 &= \underbrace{20 + 2}_{\text{え}} \\
 &= 22
 \end{aligned}$$

手順2

$$\begin{array}{r}
 2 \\
 3 \overline{)66} \\
 \underline{6} \\
 0
 \end{array}$$

【 $66 \div 3$ の筆算】の手順2で十の位にたてた「2」は、上の式のあ、い、う、えのどの計算をした結果を表していますか。1つ選んで、その記号を書きましょう。

▲ 課題

(2位数) $\div$ (1位数)の筆算について、図を基に、各段階の商の意味を考える問題

商が2になる式($6 \div 3$)を選ぶ誤答が見られました。

全国	47.6	本県	47.3 (-0.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

筆算を式と関連付けて考察できるようにするために、筆算の手順を具体物や図に表したり、具体物の操作や、図で考えた結果を式に表したりすることが大切です。

◇算数の学習に関連する質問における特色

[児童質問紙(54)] 「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」

○肯定的な回答をした児童の割合	全国	93.3	本県	95.7 (+2.4)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

算数の有用性を感じている割合が高くなっています。

[児童質問紙(算(1))] 「言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題について、どのように解答しましたか」

○「全ての問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童の割合	全国	80.3	本県	86.3 (+6.0)	自校	
------------------------------------	----	------	----	----------------	----	--

問題解決に向け粘り強く取り組もうとする意識が高いことが見取れます。

[学校質問紙(46)] 「調査対象学年の児童に対する算数の授業において、前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行った」

○肯定的な回答をした学校の割合	全国	92.1	本県	97.7 (+5.6)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

令和4年度調査の84.1%から大きく改善が図られています。

[児童質問紙(51)] 「算数の勉強は好きか」

●肯定的な回答をした児童の割合	全国	61.4	本県	66.0 (+4.6)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

全国平均を上回っていますが、これまでの調査で最も低い数値となりました。



☆課題の改善と指導の充実に向けた取組のポイント

- ・児童が算数を学ぶことの楽しさに気付くことができるよう、算数を日常生活の事象と結び付ける活動、具体物を操作したり、実際の数や量の大きさを実測したりする活動を意図的、計画的に取り入れるなど、数学的活動の充実を図る必要があります。

中学校第3学年 数学

◇平均正答率

()内の数値は全国比

	全体	学習指導要領の領域				問題形式		
		A 数と式	B 図形	C 関数	D データの活用	選択式	短答式	記述式
全国	51.0	63.0	33.2	51.2	48.5	45.3	62.6	41.6
本県	52	64.7 (+1.7)	32.6 (-0.6)	52.8 (+1.6)	49.2 (+0.7)	43.0 (-2.3)	63.8 (+1.2)	45.1 (+3.5)
自校								

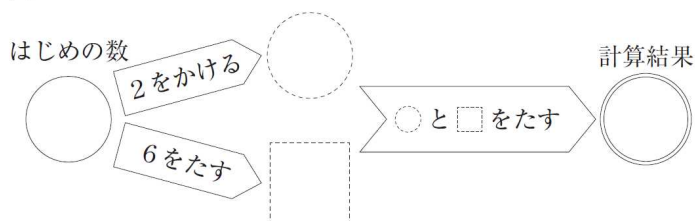
概要

- 「A数と式」及び「C関数」の領域において、2ポイント程度全国平均を上回っています。
- 「記述式」の問題形式において、3ポイント以上全国平均を上回っています。
- 「B図形」の領域において、1ポイント程度全国平均を下回っています。
- 全国平均を下回っている6問のうち、5問が知識・技能の観点でした。

中学校第3学年 数学 調査結果から見られた成果

◇設問ごとの顕著な例 [6(2)] 【A数と式】

図2



夏希さんは、はじめの数としてどんな整数を入れても「はじめの数にかけられる数が2、たす数が6ならば、計算結果はいつでも3の倍数になる」と予想しました。

この予想が成り立つことを説明します。下の説明2を完成しなさい。

説明2

はじめの数として入れる整数を n とすると、はじめの数に2をかけた数は $n \times 2$ 、6をたした数は $n + 6$ と表される。

計算結果は、

$$n \times 2 + (n + 6)$$

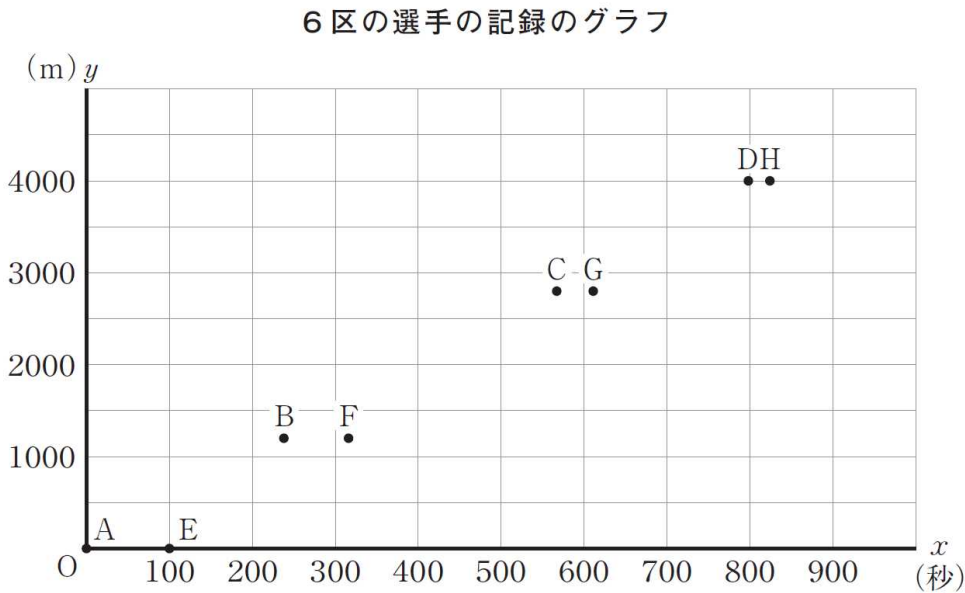
=

○ 成果

目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明する問題

全国	58.8	本県	66.4 (+7.6)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例
[8(1)] 【C関数】



(1) 晴天大学が駅前を通過した時間と新緑大学が駅前を通過した時間の差は、上の**6区の選手の記録のグラフ**に表された点Aから点Hのうち、2つの点のx座標の差に表れます。点Aから点Hまでの中から、その2つの点を選んで書きなさい。

○ 成 果					
与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取る問題					
全国	57.5	本県	60.4 (+2.9)	自校	

◇設問ごとの顕著な例
[8(3)] 【C関数】

新緑大学が晴天大学に追いつくのが、6区スタート地点からおよそ何mの地点になるのかを考えます。下の**ア、イ**のどちらかを選び、それを用いておよそ何mの地点になるのかを求める方法を説明しなさい。**ア、イ**のどちらを選んでも説明してもかまいません。また、実際に何mかを求める必要はありません。

- ア 晴天大学のグラフと新緑大学のグラフ
- イ 晴天大学の式と新緑大学の式

○ 成 果					
事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する問題					
全国	42.8	本県	48.8 (+6.0)	自校	

◇設問ごとの顕著な例 [1]【A数と式】

下のアからオまでの数の中から自然数をすべて選びなさい。

ア -5

イ 0

ウ 3

エ 4.7

オ 9

▲ 課 題

自然数の意味の理解を確かめる問題

自然数は0と正の整数であると捉えている誤答が見られました。

全国	46.1	本県	41.8 (-4.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

整数を正の整数（自然数）、0、負の整数と捉え直し、整数の意味についての理解を深めることが大切です。新しく捉え直した数の集合の定義に基づいて、様々な数の中から自然数や整数を判断する活動を取り入れることが考えられます。また、数の範囲に着目して様々な事象を考察し、正の数と負の数の必要性や意味について振り返り、自然数や整数の意味を確認することも大切です。

◇設問ごとの顕著な例 [3]【B図形】

空間における平面が1つに決まる場合について正しく述べたものを、下のアからエまでのの中から1つ選びなさい。

ア 1点をふくむ平面は1つに決まる。

イ 2点をふくむ平面は1つに決まる。

ウ 1つの直線上にある3点をふくむ平面は1つに決まる。

エ 1つの直線上にない3点をふくむ平面は1つに決まる。

▲ 課 題

空間における平面が同一直線上にない3点で決定されることの理解を確かめる問題

同一直線上にある3点で平面が一つに決まるという誤答の割合が36.7%であり、正答率よりも高くなっています。

全国	30.4	本県	28.1 (-2.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

身の回りにある事象を図形として捉え、見いだした点や直線などを基に平面が一つに決まるための条件を考察することを通して、空間における平面について理解を深められるようにすることが大切です。空間における平面が一つに決まる条件として、「2点を含む平面は一つに決まる」など、条件として不十分なものを取り上げ、平面が一つに決まるには更にどのような条件が必要かを考察する活動を取り入れることが考えられます。

中学校第3学年 数学 質問紙調査の結果から

◇数学の学習に関連する質問における特色

〔生徒質問紙(56)〕「数学の勉強は大切だと思う」

○肯定的な回答をした生徒の割合	全国	85.0	本県	90.7 (+5.7)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

〔生徒質問紙(58)〕「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」

○肯定的な回答をした生徒の割合	全国	75.8	本県	83.8 (+8.0)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

〔学校質問紙(46)〕「調査対象学年の児童に対する算数の授業において、前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行った」

○肯定的な回答をした学校の割合	全国	88.0	本県	93.5 (+5.5)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

これまでの調査で最も高い数値となりました。日常生活との関連を大切にした授業づくりを進めようとする意識が高いことが見取れます。

〔生徒質問紙(57)〕「数学の授業の内容はよく分かる」

●肯定的な回答をした生徒の割合	全国	73.3	本県	77.5 (+4.2)	自校	
-----------------	----	------	----	----------------	----	--

20%以上の生徒が否定的な回答をしている現状があることから、一人一人の生徒が「分かった」「できた」を実感できる授業を目指し、引き続き授業改善に取り組む必要があります。

☆課題の改善と指導の充実に向けた取組のポイント

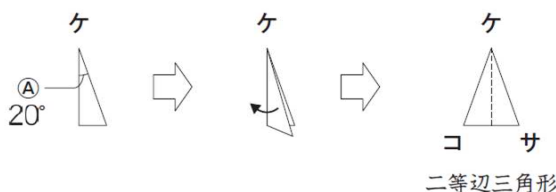
- ・生徒が「分かった」「できた」を実感するためには、自力解決の場面で生徒一人一人が自分の考えをもてるように見通しをもたせることや、正しい考えだけでなく誤答や途中までの考えなども丁寧に見取り、それらを生かして全員が「分かった」を実感できる学び合いを展開することが必要です。また、生徒が自らの学習を改善することができるよう、評価及び振り返りの場面や方法を工夫し、生徒が数学のよさを実感したり、自身の学びや変容を自覚したりできるようにすることが大切です。

令和5年度の算数・数学の成績は全体的に良好でした。多くの問題で、全国平均を上回っていますが、「正三角形の意味や性質についての理解」「空間における平面の決定についての理解」は、50%を下回っており、全国平均も下回っています（下図。小学校〔2(3)〕「テープ」問題：秋田県平均正答率23.5%、全国平均正答率24.9%。中学校〔3〕「空間図形」問題：秋田県平均正答率28.1%、全国平均正答率30.4%）。これらの結果は、新たな探究型授業を目指すための重要なメッセージとして、注目しましょう。

小学校〔2(3)〕「テープ」問題



私は、**Ⓐ**の角の大きさを 20° にしました。切って開いた三角形**ケコサ**は、二等辺三角形になりました。



私は、切って開いた三角形を正三角形にするために、**Ⓐ**の角の大きさをゆいなさんと同じく大きさにして切りました。

切って開いた三角形を正三角形にするには、**Ⓐ**の角の大きさを何度にすればよいですか。答えを書きましょう。

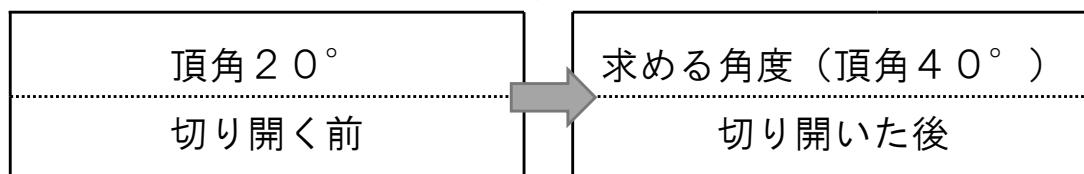
中学校〔3〕「空間図形」問題

空間における平面が1つに決まる場合について正しく述べたものを、下の**ア**から**エ**までの中から1つ選びなさい。

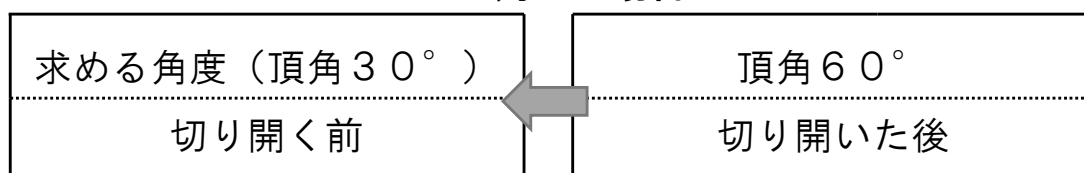
- ア** 1点をふくむ平面は1つに決まる。
- イ** 2点をふくむ平面は1つに決まる。
- ウ** 1つの直線上にある3点をふくむ平面は1つに決まる。
- エ** 1つの直線上にない3点をふくむ平面は1つに決まる。

例えば、「テープ」問題では、正答は30度ですが、誤答の多くは、切り開いた後の角の大きさの60度と誤っています。ゆいなの解決から、「直角三角形の頂角を20度」にすると、「頂角40度の二等辺三角形」になる関係性が分かります。ただし、頂角の大きさは、問題文の「20度」「二等辺三角形」と、図の操作「切り開く」を基に、自ら求めなくてははいけません。60度と解答した児童のなかには、切り開いた後の角を目にしつつも、40度と求めている可能性があります。そうすると、切り開く前の角の大きさと、切り開いた後の角の大きさの関係性を捉えることもできません。正三角形の場合、その関係性は同じですが、二等辺三角形の場合と逆向きに考える難しさがあります（下図）。解決にあたっては、問題文や図の操作を基に、自らも操作し、この関係性を捉えられるようにすることです。

二等辺三角形の場合



正三角形の場合



「空間図形」問題においては、正答は「エ 1つの直線上にない3点をふくむ平面は1つに決まる」ですが、「イ 2点をふくむ平面は1つに決まる」「ウ 1つの直線上にある3点をふくむ平面は1つに決まる」の誤答が、正答と同程度見られます。教科書では、指先で下敷きを支えたり、三脚の脚を操作したりする活動が示されています。このような活動をして、生徒は、「安定する」「安定しない」の結果を得るに留まることがあります。これらの結果が、どのような条件によるものか、さらに調べていくよう促したいです。少し時間がかかりますが、活動するなかで、条件の「点の数」「位置関係」に気付けるはずです。活動から見出した条件とその関係は、明確に意識されることでしょう。さらに、「1つの直線上にない3点をふくむ平面は1つに決まる」の決定条件についても、教師から示す前に、生徒がどのように表現したらよいかを考えることもよいです。「1つの」「直線上にない」「3点を含む」と表現することの重要性を理解できるでしょう。

異なる2つの問題ですが、児童生徒自身が問題に働きかけることで、問題の把握や思考を進める共通点があります。つまり、児童生徒が主体となる数学的活動を展開することが重要です。しかしながら、児童生徒が問題に働きかけて取り組んでも、円滑に解決しない場合があります。それでも、すぐに解決の方法を示すのではなく、「何に注目しているのか」「どのように解決したいのか」を洞察し、児童生徒に必要な支援を考えることが重要です。

問題解決の主体は、児童生徒です。児童生徒には、真に強い問題解決能力を身に付けてほしいと思います。そのためにも、自らの取り組みが重要であることを認識してもらう必要があります。教師は、解決の方法や結果を示すのを、少し我慢することも大切です。問題解決で有名なポリア（1945／1954）は、問題の把握において、「未知のもの」を捉えることの重要性を述べています。教師が「分からないことは何ですか」と確認する授業も見受けられますが、「分からないことがある」という児童の気付きを促すことが重要です。問題提示後、「何か気付いた？」「何か困っている？」などと働きかけ、児童生徒自身が、問題を理解するためには「考えなければ分からないこと」を明らかにしていけるよう、児童生徒に寄り添った伴走型の支援をしましょう。

最後に、本稿のまとめです。

児童生徒自身が問題に働きかけ、問題解決していけるよう、教師は、児童生徒の取り組みに寄り添う伴走型の支援に努めよう。

*ポリア（1954）．「いかにして問題をとくか」（柿内賢信訳）．丸善出版．（原著出版1945年）

中学校第3学年 英語

◇平均正答率

()内の数値は全国比

	全体 (話すことを除く)	学習指導要領の領域				問題形式		
		聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	選択式	短答式	記述式
全国	45.6	58.4	[12.4]	51.2	23.4	54.8	30.1	13.5
本県	44	56.5 (-1.9)		51.5 (+0.3)	20.2 (-3.2)	54.0 (-0.8)	26.1 (-4.0)	11.5 (-2.0)
自校								

「話すこと」の正答率は推計値(当日実施校の調査結果に統計的補正をかけ、全国値として推定したもの)

概要

- 「読むこと」の領域において、社会的な話題について書かれた短い文章の要点を読み取る問題の平均正答率が全国平均を上回っています。
- 「聞くこと」及び「書くこと」の領域において、平均正答率が全国平均をやや下回っています。
- 文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書くことや、日常的な話題について事実や自分の考えなどを整理して、まとまりのある文章を書くことに課題が見られます。

中学校第3学年 英語 調査結果から見られた成果

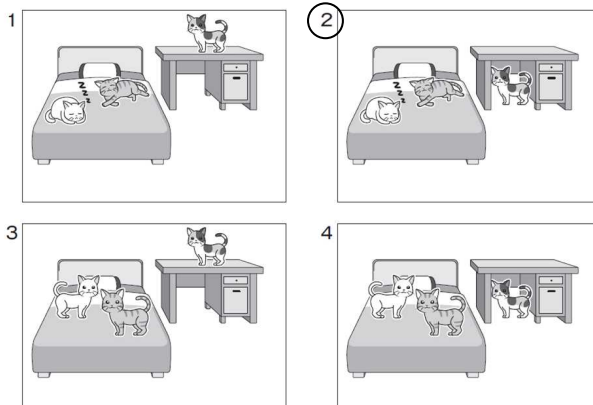
◇設問ごとの顕著な例【聞くこと】

【1(1)】【聞くこと】

話される英語を聞いて、その内容を最も適切に表している絵を、それぞれ1から4までの中から1つ選びなさい。

【スクリプト】

Look at this picture. There are three cats. You can see a cat under the desk. And the other cats are on the bed. They are sleeping.



○ 成果

情報を正確に聞き取る問題

全国	79.0	本県	82.4 (+3.4)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例 【5(2)】【読むこと】

次の英文には、事実や考えが書かれています。考えが書かれている英文を、下線部1から4までの中から1つ選びなさい。

There is a mountain in our city. It is 815 meters high. I went there
1 2
this summer with my family. I saw a lot of garbage. I was surprised to
see it. We cleaned the place for about 30 minutes. Everyone should
3 ④
bring their garbage back home.

○ 成 果

「事実・情報を伝える」と「考えや意図を伝える」という言語の働きを理解し、事実と考えを区別して読む問題

全国	64.5	本県	65.8 (+1.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例 【8(1)】【読むこと】

英語の授業で、ブラウン先生が作成した文章が学習者用端末に送信されました。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

(1) ブラウン先生が最も伝えたいことを、下の1から4までの中から1つ選びなさい。

- 1 We see many kinds of robots around us.
- 2 I saw a robot and it was working as a guide.
- 3 People will have fun if they live with robot pets.
- ④ Robots can change many people's lives for the better.

【ブラウン先生が作成した文章】

Today we see many kinds of robots around us. They are helpful. When I went shopping, I saw a robot and it was working as a guide. I could talk to the robot in English or other languages. At some restaurants, robots bring our meals. They can carry many plates at one time. Thanks to them, the restaurant doesn't need a lot of staff members. We have robot pets, too. We can have them even if we are busy with work or we live in small apartments. People will have fun if they live with robot pets. As I explained, robots can change many people's lives for the better. Do you agree with me? Why or why not?

○ 成 果

社会的な話題について、短い文章の要点を捉える問題

全国	56.1	本県	58.4 (+2.3)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

◇設問ごとの顕著な例 [2] 【聞くこと】

あなたは買物からの帰宅後、ショッピングセンターに傘を忘れたことに気が付きました。電話で問合せをしたところ、自動音声案内につながりました。流れてくる音声メッセージを聞き、あなたが選択すべき番号として最も適切なものを、下の1から4までの中から1つ選びなさい。

【スクリプト】

This is ABC shopping center. Thank you for calling. How can we help you? If you want to know our opening hours, please choose number 1. If you want to join our shopping club, please choose number 2. If you lost something in our shopping center, please choose number 3. If you have any questions about shops and restaurants in our shopping center, please choose number 4.

▲ 課題

日常的な話題について、目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる問題

全国	61.1	本県	54.3 (-6.8)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取ることができるようにするためには、話されることの全てを聞き取ろうとするのではなく、目的に応じて必要な情報は何かをはっきりさせて、それらに関連する語句や表現に着目して聞き取るように指導することが大切です。例えば、店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスなどを聞いて、自分が必要とする情報を聞き取る言語活動に取り組むことが考えられます。

◇設問ごとの顕著な例 [8(2)] 【書くこと】

英語の授業で、ブラウン先生が作成した文章が学習者用端末に送信されました。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

【ブラウン先生が作成した文章】

Today we see many kinds of robots around us. They are helpful. When I went shopping, I saw a robot and it was working as a guide. I could talk to the robot in English or other languages. At some restaurants, robots bring our meals. They can carry many plates at one time. Thanks to them, the restaurant doesn't need a lot of staff members. We have robot pets, too. We can have them even if we are busy with work or we live in small apartments. People will have fun if they live with robot pets. As I explained, robots can change many people's lives for the better. Do you agree with me? Why or why not?

▲ 課題

社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる問題

全国	19.5	本県	16.3 (-3.2)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

読んだことを基に自分の考えとその理由を書く際には、読み手として主体的に考えたり、判断したりしながら理解したことを基に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて表現することが重要です。例えば、教科書に取り上げられている話題に関する自分の意見や感想を、新聞やホームページへの投稿文の形式で書く活動に取り組むことが考えられます。

(2) ブラウン先生の質問に対するあなたの考えと理由を英語で簡潔に書きなさい。

中学校第3学年 英語 調査結果から見られた課題

◇設問ごとの顕著な例 [9(1)②] 【書くこと】

(1) 次の①、②について、例を参考にしながら、必要があれば()内の語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、それぞれ会話が成り立つように英文を完成させなさい。

② <友達同士の会話>

A : Oh, you have a new watch!

B : Yes, I got it yesterday.

A : (buy) the watch?

B : At a department store near the station.

▲ 課題

疑問詞を用いた一般動詞の2人称単数過去形の疑問文を正確に書くことができるかどうかをみる問題

全国	20.9	本県	14.4 (-6.5)	自校	
----	------	----	----------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

場面や状況に応じて正確に英文を書くためには、文脈から適切な文の形式や時制を判断することが大切です。例えば、書いた英文が相手に正しく伝わるかどうかについて、自分で読み直して誤りを修正したり、ペアでチェックし合ったりして、正確な英文に書き直す活動を行うことが考えられます。

◇設問ごとの顕著な例 [10] 【書くこと】

あなたの学校では、学校の英語版ウェブサイトを公開しています。あなたは、そのサイトに学校紹介文を掲載することになりました。学校生活(行事や部活動など)の中から紹介したいものを1つ取り上げ、それについて説明するまとまりのある文章を25語以上の英語で書きなさい。

▲ 課題

日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く問題

全国	7.4	本県	6.6 (-0.8)	自校	
----	-----	----	---------------	----	--

☆改善に向けた取組のポイント

テーマについてまとまりのある文章を書くためには、テーマについて事実や考えを整理し、どのように書けばよりよく読み手に伝わるのかを考えながら書くことが重要です。例えば、身近な話題について、手紙や電子メールなどの形式により、自分の考えや気持ちなどが伝わるように文章を書く活動に取り組むことが考えられます。

中学校第3学年 英語 質問紙調査の結果から

◇英語の学習に関連する質問における特色

[生徒質問紙(60)] 「英語の勉強は大切だと思うか」						
○肯定的な回答をした児童の割合	全国	88.0	本県	90.2 (+2.2)	自校	
[生徒質問紙(70)] 「1、2年生のときに受けた授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思うか」						
○肯定的な回答をした児童の割合	全国	82.8	本県	89.1 (+6.3)	自校	
[学校質問紙(53)] 「自分の考えや気持ちなどを英語で書く言語活動を行ったか」						
○肯定的な回答をした学校の割合	全国	91.9	本県	96.3 (+4.4)	自校	
[学校質問紙(56)] 「英語担当教員とALTとの間で、授業のねらいや活動の意図、各学級や一人一人の生徒の実態等について共通認識を持ち、協力して授業を行うことができていると思うか」						
○肯定的な回答をした学校の割合	全国	94.1	本県	100.0 (+5.9)	自校	
[生徒質問紙(65)] 「家庭学習の課題(宿題)として、PC・タブレットなどのICT機器を使用して、英語の音声を聞いたり英語を話す練習をしたりしているか」						
●週1回以上と回答した生徒の割合	全国	22.9	本県	16.8 (- 6.1)	自校	
[生徒質問紙(英1)] 「まとまりのある文章を書く問題についてどのように解答したか」						
●「書く内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった」と回答した生徒の割合	全国	61.5	本県	68.4 (+ 6.9)	自校	
[学校質問紙(59)] 「家庭学習の課題(宿題)として、生徒にPC・タブレットなどのICT機器を使用して、英語の学習をどの程度行わせているか」						
●「週1回以上」と回答した学校の割合	全国	35.5	本県	15.9 (-19.6)	自校	

☆課題の改善と指導の充実に向けた取組のポイント

- ・生徒質問紙及び学校質問紙の結果では、「自分の考えや気持ちなどを英語で書く言語活動が行われた(行った)」と肯定的に回答している生徒や学校の割合が高い傾向にあります。一方で、教科に関する調査の「書くこと」の領域には課題が見られます。中学校学習指導要領外国語編第2節「書くこと」の領域に示されている目標を踏まえた言語活動を通して、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成していく必要があります。
- ・「書く内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった」と回答した生徒の割合が高い傾向にあります。語彙や文法事項については、伝える内容や目的や場面、状況等に関連させて指導することが重要です。言語活動を通して、繰り返し活用させることで、確実な定着を図る必要があります。
- ・生徒の学習の状況に応じてICTを活用し、授業における言語活動と家庭学習とを効果的に結びつけながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることが重要です。
- ・小・中学校における学びの連続性を意識し、域内の小学校と連携し、学習到達目標リスト〔CAN-DO形式〕などを活用して、系統性を踏まえた指導計画や評価計画の作成を行ったり、効果的な指導の在り方の共有を図ったりするなどして、小・中学校の接続に配慮した授業改善に取り組む必要があります。

1. 概況が示す今後の方向性

今年度の英語の結果は、全国(公立)平均正答率が45.6%、最高53%、最低36%、都道府県・指定都市のスコアがすべて平均から±10%の範囲内にあり大差なしと報告されています(『令和5年度全国学力・学習状況調査 報告書 中学校 英語』p.14)。本県も全国も、英語の特徴は正答数が低いことにあります(図1.参照)。本県の3つの代表値を見ると、最頻値(青色)が4問、中央値(橙色)が7問、平均値が7.5問(44% 緑色)で、グラフが左側すなわち正答数が少ない側に偏っています。正答数が多い右側への偏りを示す国語[設問数15問で最頻値13、中央値12、平均値11.1(74%)]とは対照的な結果です。

英語は5割を下回る平均正答率でしたが、育成すべき資質・能力を測る良問であったと思います。今後の方向性としては、まずはこの左側に偏ったグラフを、徐々に3つの代表値が真ん中に位置する正規分布を示すグラフに近づけ、最終的には右側に偏るグラフに変えることが理想的です。

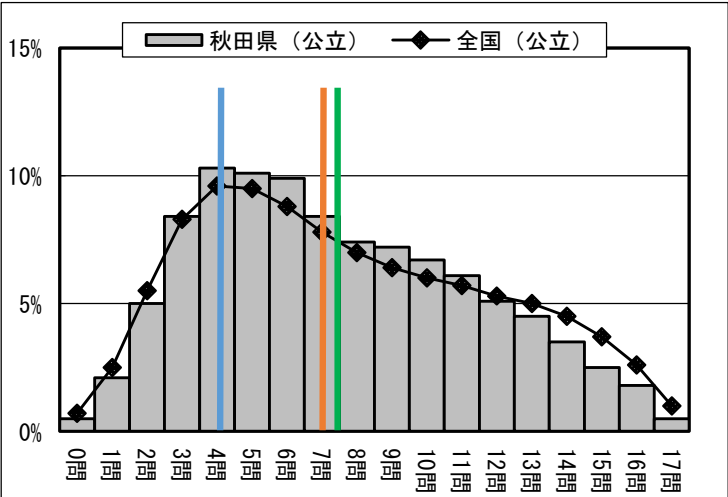


図1. 正答数分布グラフ(横軸: 正答数 縦軸: 割合)

2. 平均正答率5割未満の問題とは？

全国的にも5割未満の平均正答率は、全17問中9問(青線より上の項目)で見られます(表1. 参照)。具体的には、「聞くこと(L)」で2問(設問1③「買物」、3「BBQ」)、「読むこと(R)」で3問(設問6「イベント選択」、7②「図書館の概要」、8②「ロボット(読んで書く)」)、「書くこと(W)」では全4問においてです。この9問中、全国より3ポイント以上低かった設問(赤のセル)は、Lの1③と3、R+Wの8②、Wの9①①「am going to visit」の4問、5ポイント以上低かった設問(水色のセル)は9①②「Where did you buy」の1問、これにLの2「電話自動音声案内」が加わります。評価観点別では、5割未満正答率を示す9問には、「思考・判断・表現」を測る8問中5問が、問題形式別では「短答式」「記述式」の5問中すべてが含まれます。

一方、5割以上正答率を示す8問では、「知識・技能」を測る問題が半数以上、問題形式はすべて「選択式」であり、「短答式」「記述式」はありません。

3. 課題はどこに：オレンジ色と緑色のセルの特徴は？

実際のコミュニケーションとテストの違いに、「実際に行動する(Action)」かどうかがあります。表1. のオレンジ色のセルの8つの設問に共通の特徴は、Actionを直接的に引き出す問題であるということです(他の9つの問題は、「理解に止まる」問題)。起こすべき行動や発言を自分が実際に行うと仮定してみましょう。Lの2を聞き違えると、電話がつながらず(お気に入りの)傘が取り戻せなくなるかもしれません、3ではリーダーとしてメンバーに適切な指示を出せず信頼を損ねかねません。Rの6でイベント選択を間違えると、Davidの週末が台無しになりかねず、8②で考えを伝えなければ、折角意見交換を楽しみにしていたALTをがっかりさせてしまうかもしれません。Wの9①では会話が途切れ、9②ではスミス先生を不快にする懸念があり、10では学校のウェブサイトのコンテンツが不足しかねません。「話すこと(S)」の5問も相手に影響するActionを含む問題でした。「自分のとる行動や発言が、事の結果を左右し、相手や他者に影響する」ことを想定した、言語による

正答率昇順	設問	技能	評価の観点		問題形式			正答率(%)		
			知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式	記述式	平均差	秋田県(公立)	全国(公立)
1	10	W		○			○	-0.8	6.6	7.4
2	9(1)②	W	○			○		-6.5	14.4	20.9
3	8(2)	R+W		○			○	-3.2	16.3	19.5
4	9(2)	W	○			○		-2.1	26.9	29.0
5	7(2)	R		○	○			-0.9	33.8	34.7
6	9(1)①	W	○			○		-3.6	36.8	40.4
7	6	R		○	○			1.0	36.9	35.9
8	3	L		○	○			-3.0	38.2	41.2
9	1(3)	L	○		○			-4.3	45.5	49.8
10	2	L		○	○			-6.8	54.3	61.1
11	4	L		○	○			-0.4	54.4	54.8
12	5(1)	R	○		○			0.8	56.8	56.0
13	7(1)	R	○		○			-2.3	57.5	59.8
14	8(1)	R		○	○			2.3	58.4	56.1
15	1(2)	L	○		○			-0.2	64.2	64.4
16	5(2)	R	○		○			1.3	65.8	64.5
17	1(1)	L	○		○			3.4	82.4	79.0

表1. 秋田県の正答率の低い設問の順(昇順)

Actionに責任が生じる種類の問題です。「英語を使う際に責任を感じ、受け身にならない学習者の育成」が必要であることがデータからわかります。

つぎに注目すべきは概要や要点を捉える問題です。緑色のセルの2つ(4、8(1))は「要点＝最も伝えたいこと」を捉える問題で5割台の正答率でした。一方、「概要＝文章全体の大まかな内容」を測る7(2)は3割台の正答率でした。学校質問紙調査において、9割以上の学校が「聞いて/読んで概要や要点をとらえる言語活動」を行ったと回答していることから、この良い傾向を継続させると共に、要点と概要の設問の正答率の差を踏まえ、両者の違いを意識した精緻な指導が求められていると解釈できます。

4. 授業改善のヒント

前回同様、今後の英語科教育の在り方を示し波及効果が期待される調査となりました。授業改善の方策は各校の特徴に応じて様々に考えられますが、秋田県全体のデータからは、「なんとなく」から「徹底的」ということが最大のポイントになると思われます。選択式では曖昧であっても偶然でも「なんとなく」正解に至りますが、短答式、記述式では正確な理解と表現ができる確かな英語力が必要です。だからといって形式偏重に回帰することは避けるべきです。解決策は、言語活動による指導を質量ともに「徹底的」に高めるこ

とです。

学校質問紙調査の「①よく行った」と「②どちらかといえば、行った」の合計に注目しがちですが、「②どちらかといえば、行った」と「③どちらかといえば、そう思わない」の合計にも貴重な示唆が含まれていると思います。「どちらかといえば」という語は、回答者の感覚次第で②にも③にも回答させる可能性があります。

質問項目(49)～(55)において、②+③が6割を占める項目を徹底することで、成果が出てくると考えます。その項目は、即興での伝え合い(S)、スピーチ・プレゼン(S)、聞いたり読んだりしたことを問答・述べ合う(L/R+S)またはまとめて書く(L/R+W)の4項目です。いずれも目の前にいる相手とinteractionを行う言語活動です。これらの言語活動による指導が徹底していないことが、Actionが必要とされる8つの設問(オレンジ色のセル)の正答率に影響があると解釈します。すると、授業改善の鍵は、ひとりひとりの生徒が責任を持って他者と関わる言語使用を促進させる、そのような言語活動のデザインと指導にあるといえるでしょう。なお、(57)の「言語活動等の授業改善・パフォーマンステスト等の評価改善」も徹底して行う必要性を示す結果となっています。

受け身の姿勢から脱した主体的な言語学習者を育てる具体策の例として、次の5点を提案します。

- ・ **メモとり**：表を埋める受身の形式ではなく、生徒が自ら白紙にメモをとる形で情報を整理させます。
- ・ **not 言語操作but 言語創出**：ことばは「メッセージ」であると意識させ、コミュニケーションの目的(purpose of communication)が明確な言語活動をデザインし指導します。SDGsやGlobal Communicationも意識させます。
- ・ **即興は「待つwait」「練習practice」「振り返りreflection」を大事に**：即興力が必要だからといって早く話せようとする、単なる反応(Really?、Wow!等)に終始しがちです。内容は思考+判断(選択)から生まれ、言語は判断(選択)+表現によるものですので、即興力の養成は入念で継続的な指導が必要です。逆説的ですが、待つことで励まし、目的・場面・状況を少しずつ変化させた練習の機会を繰り返し与え、生徒の自主性を尊重し、徐々に即興性を高めてあげます。また、振り返りの減少が報告されていますが、内容面と言語面の両面での気づきを言語化し、自分の言語使用を見つめる振り返りをすることは英語力を伸ばす重要な方法です。
- ・ **ALTと「本物authentic」「参加engagement」「内容のあるnot surface level」授業に**：設問8は実際の授業でのALTの活用例を示しています。本物のコミュニケーションに参加させること自体が学びの機会を保障し、受身となることを回避させます。内容のある話題については、統合的な活動でやり取りを重ねながら理解をほぐし少しずつ表現を伸ばしていくことで、自然と言語習得の機会が増えます。また、意味を中心としながら必要な文法や語彙の言語形式に目を向けさせる指導(focus on form)により、意味+形+機能の3要素をバランスよく結び付けた指導をALTと協働で工夫し、実践と反省を生かすPDCAサイクルを確立しましょう。
- ・ **ICTの活用で習慣化と動機付けを**：日常的に英語に触れる機会や時間を多くし、動機づけを高めるには普段からのICTの活用が有効です。英語力の停滞化(stabilization)/化石化(fossilization)を防ぐことにつながります。生徒質問紙調査から、英語の勉強は大切、将来役立つという回答が9割である一方、英語の勉強は好き、授業内容が分かるは6割程度です。意欲的に英語に向き合えるような習慣付けが望まれます。

質問紙調査

質問紙調査の結果には、本県の児童生徒の生活習慣、学習習慣等の状況や、各学校における教育活動の取組について、これまでと同様に良好な状況が表れています。

特に、家庭学習や、家庭や地域との関わりに関する質問項目においては、児童生徒質問紙、学校質問紙ともに、肯定的な回答の割合が10ポイント以上高い項目が複数見られ、学校の取組が児童生徒の良好な状況につながっていることを見取することができます。

資料中の表の数値は、上段：「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」等、肯定的な回答の割合の合計。
下段：肯定的な回答のうち「当てはまる」等と回答した割合。

生活習慣、豊かな人間性等

児童生徒質問紙調査	自校	小学校 6 年生		中学校 3 年生	
		秋田県	全国比	秋田県	全国比
朝食を毎日食べていますか		95.2 (86.2)	+ 1.3 (+ 2.5)	94.6 (84.2)	+ 3.4 (+ 5.6)
毎日、同じくらいの時刻に起きていますか		92.9 (59.3)	+ 2.4 (+ 4.2)	94.3 (63.3)	+ 3.0 (+ 8.5)
自分には、よいところがあると思いますか		87.1 (43.7)	+ 3.6 (+ 1.1)	84.9 (41.0)	+ 4.9 (+ 3.8)
人が困っているときは、進んで助けていますか		93.4 (49.7)	+ 1.8 (+ 4.1)	92.7 (48.4)	+ 4.6 (+10.0)
友達関係に満足していますか [新規]		91.5 (65.6)	+ 1.2 (+ 2.4)	91.0 (60.6)	+ 2.3 (+ 5.3)
普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか [新規]		92.1 (51.0)	+ 1.1 (+ 1.1)	88.5 (44.7)	+ 1.7 (+ 3.8)

家庭学習

児童生徒質問紙調査	自校	小学校 6 年生		中学校 3 年生	
		秋田県	全国比	秋田県	全国比
家で自分で計画を立てて勉強をしていますか		85.7 (44.5)	+15.0 (+15.8)	70.6 (26.6)	+15.6 (+11.3)
学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか		(30分以上) 94.0 +10.0		(1時間以上) 73.6 + 7.8	

学校質問紙調査	小 学 校		中 学 校	
	秋田県	全国比	秋田県	全国比
前年度までに、家庭学習の課題の課し方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか	98.9 (65.0)	+ 8.1 (+25.4)	96.3 (45.8)	+11.7 (+16.1)
前年度までに、学校では、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えましたか	99.4 (65.5)	+ 3.7 (+21.5)	98.2 (47.7)	+ 7.3 (+16.8)

家庭や地域との関わり

児童生徒質問紙調査	小学校 6 年生		中学校 3 年生	
	秋田県	全国比	秋田県	全国比
今住んでいる地域の行事に参加していますか	69.8 (35.7)	+12.0 (+11.4)	46.1 (19.1)	+ 8.1 (+ 6.9)
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか [新規]	87.4 (47.7)	+10.6 (+14.5)	80.4 (33.8)	+16.5 (+14.2)
日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか	86.1 (56.0)	+ 8.0 (+10.3)	77.8 (39.3)	+14.6 (+13.1)

学校質問紙調査	小 学 校		中 学 校	
	秋田県	全国比	秋田県	全国比
教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組を行っていますか	93.8 (32.8)	+ 7.1 (+ 8.0)	86.9 (19.6)	+ 3.7 (+ 0.5)
コミュニティ・スクールや地域学校協働活動等の取組によって、学校と地域や保護者の相互理解は深まりましたか [新規]	92.7 (26.0)	+ 6.6 (- 1.3)	86.0 (29.9)	+ 6.7 (+10.5)

主体的・対話的で深い学び

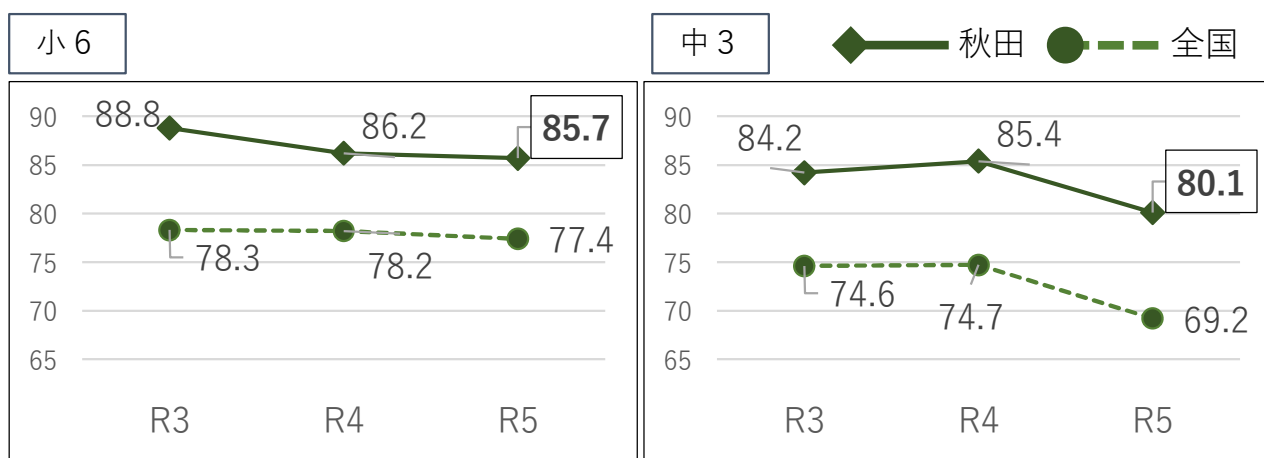
児童生徒質問紙調査	小学校 6 年生		中学校 3 年生	
	秋田県	全国比	秋田県	全国比
前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	84.2 (35.8)	+ 5.4 (+ 5.3)	86.6 (38.0)	+ 7.4 (+ 7.6)
前学年までに受けた授業は、自分にあった教え方、教材学習時間などになっていましたか	89.4 (46.6)	+ 6.5 (+ 9.3)	84.9 (33.3)	+10.0 (+10.7)
学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか	85.9 (42.8)	+ 4.1 (+ 4.2)	88.4 (47.1)	+ 8.7 (+12.8)
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか	85.7 (39.7)	+ 8.3 (+ 8.7)	80.1 (33.1)	+10.9 (+10.0)

学校質問紙調査	小 学 校		中 学 校	
	秋田県	全国比	秋田県	全国比
調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていますか	93.8 (24.9)	+ 4.9 (+ 3.5)	93.5 (26.2)	+ 5.5 (+ 7.0)
調査対象学年の児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか	87.0 (10.7)	+ 3.6 (- 6.7)	92.5 (22.4)	+ 6.3 (+ 2.1)
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学習指導において、児童生徒一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫しましたか [新規]	93.2 (19.8)	+ 0.1 (- 8.0)	93.5 (26.2)	+ 2.6 (+ 1.6)
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか	88.7 (15.8)	+ 3.1 (- 2.5)	88.8 (15.0)	+10.2 (+ 1.0)

主体的・対話的で深い学び（経年変化）

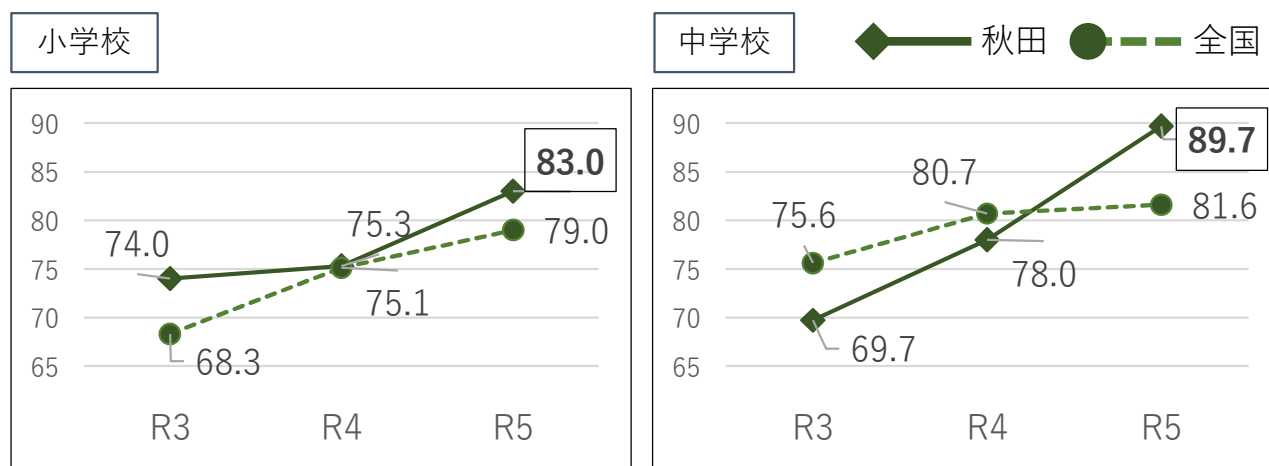
児童生徒質問紙調査の「学習の振り返り」に関する質問について、肯定的な回答の割合を経年比較してみると、全国的に減少傾向が見られ、本県においても同様の傾向が見られます。

学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている（「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合の合計）

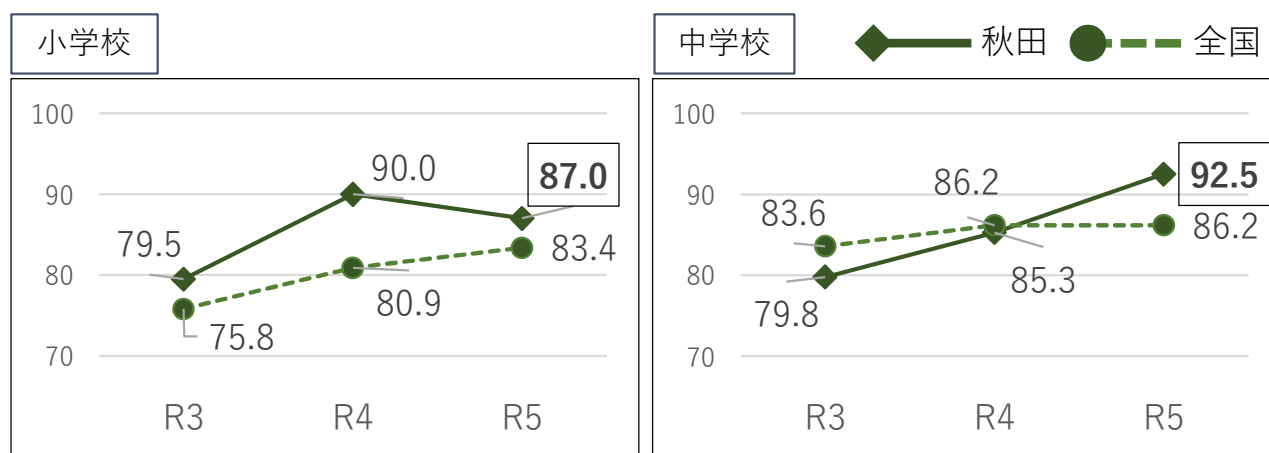


学校質問紙調査の肯定的な回答の割合を経年比較してみると、大きく向上している項目が見られます。

調査対象学年の児童生徒は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができている（「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の合計）



調査対象学年の児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている（「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の合計）

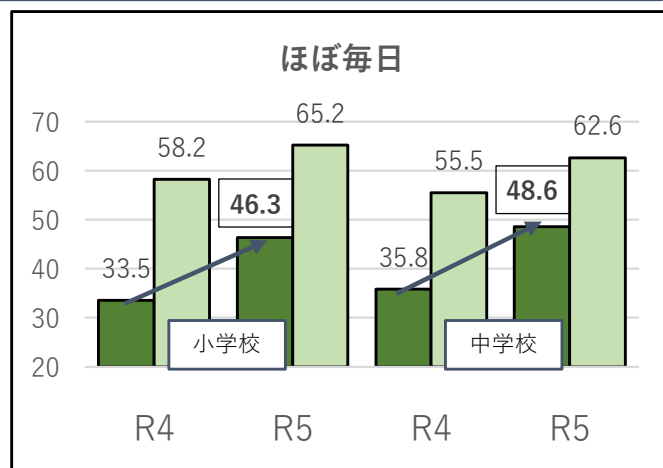
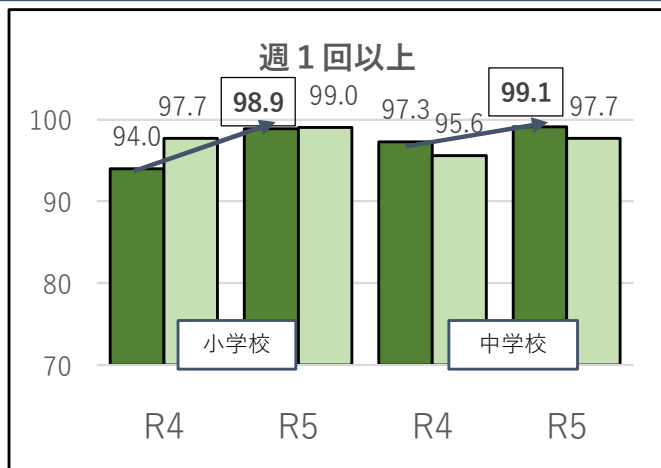


ICTを活用した学習状況（学校質問紙調査）

■ 秋田 ■ 全国

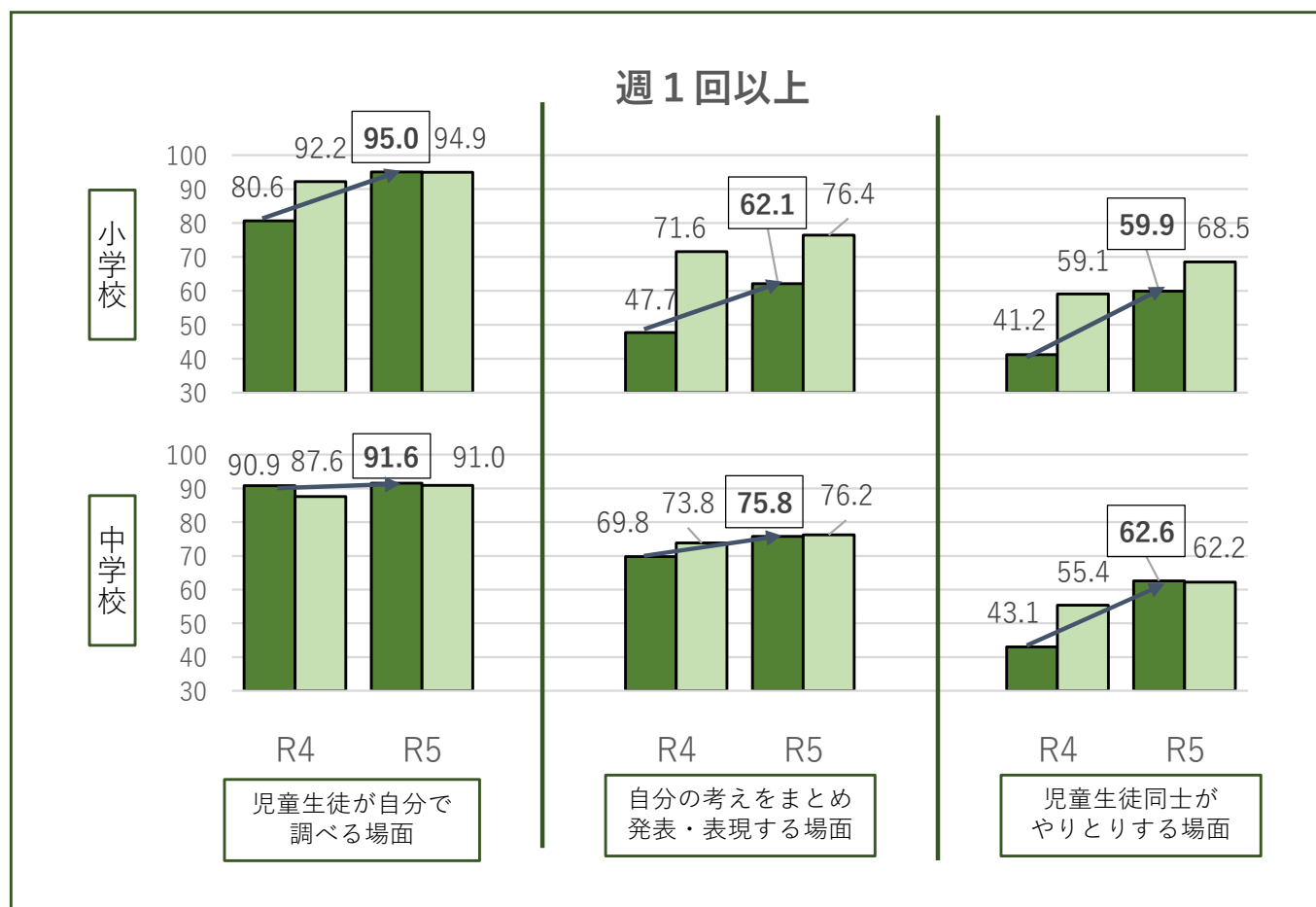
ICT機器の活用状況については、ほぼ全ての学校において週1回以上活用されています。また、ほぼ毎日使用している学校の割合が昨年度より増加し、約半数となっています。

調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、一人一人に配備されたPC・タブレット等のICT機器を、授業でどの程度活用したか



活用場面ごとの使用頻度（週1回以上）に着目すると、どの場面においても活用率が昨年度より増加しており、中学校においては、多くの場面で全国平均と同等となっています。小学校においては、自分の考えをまとめ発表・表現する場面や、児童同士がやりとりする場面での活用率が全国平均を下回っています。

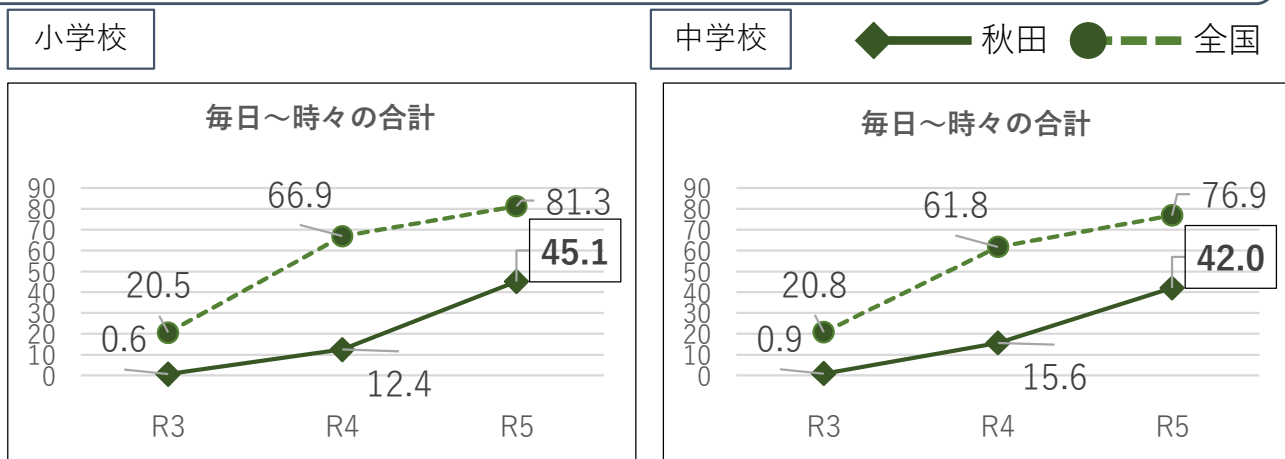
調査対象学年の児童生徒に対して、次のような場面で、一人一人に配備されたPC・タブレット等のICT機器を、授業でどの程度使用させているか



ICTを活用した学習状況（ICT機器の家庭での活用）

ICT機器の家庭への持ち帰りについて、実施している学校の割合が増加しています。

【学校質問紙】 児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどの端末を、どの程度家庭で利用できるようにしているか（毎日～時々の合計）



授業時間以外にICT機器を学習に使う時間に関する質問について、回答した選択肢別の平均正答率（クロス集計）を見ると、すべての校種、教科において、全く使っていない児童生徒よりも1時間未満使用している児童生徒の正答率が高い状況が見られます。（表は全国値。本県でも同様の状況が見られます。）

【児童生徒質問紙】 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っているか（遊びなどの目的に使う時間は除く）

回答した選択肢別の 平均正答率	小 6			中 3			
	割合 (%)	平均正答率(%)		割合 (%)	平均正答率(%)		
		国語	算数		国語	数学	英語
3時間以上	2.9	59.1	53.8	2.1	60.8	42.9	41.0
2時間以上、3時間より少ない	3.9	63.3	57.3	3.0	65.6	47.3	44.6
1時間以上、2時間より少ない	11.2	66.9	61.4	8.6	70.0	51.5	47.5
30分以上、1時間より少ない	23.3	68.9	63.9	18.1	72.3	54.0	48.8
30分より少ない	32.5	69.1	65.0	34.0	73.3	55.1	49.0
全く使っていない	26.2	65.9	61.6	33.7	67.1	47.7	42.3
その他、無回答	0.1	—	—	0.5	—	—	—

県教育委員会によるICTを活用した取組に対する支援

本県では、令和3年度から「ICTを活用した秋田の教育力向上事業」を立ち上げ、ICTを効果的に活用した授業改善の取組を支援するとともに、取組の成果等を情報発信して、本県における教育のICT化を推進しています。

ICTの効果的な活用による学校改善支援プラン

令和5年度オンライン・ミーティング

令和4年度ICT活用推進に係る支援計画
ICTの効果的な活用による
学校改善支援プラン

- 1 令和4年度ICT事業の概要
- 2 各地域の取組
- 3 ICTを活用した学びの充実に向けて
- 4 検証改善委員からの提言

- ・モデル校による実践紹介
- ・ICTを活用した学びの充実に
向けて
- ・有識者からの提言

- ・モデル校による授業動画
- ・モデル校による研究実践発表
- ・有識者、モデル校教員によるパネル・ディスカッション
- ・講演：文部科学省初等中等教育局 学校デジタル化
プロジェクトチームリーダー 武藤 久慶 氏

ダウンロードは
「美の国秋田ネット」
から→



◎ 令和6年1月10日（水）開催
◎ YouTubeによるライブ配信



詳細は「わか杉学びネット」から→

令和5年度全国学力・学習状況調査結果について

令和5年度 全国学力・学習状況調査の活用に係る検証改善委員会

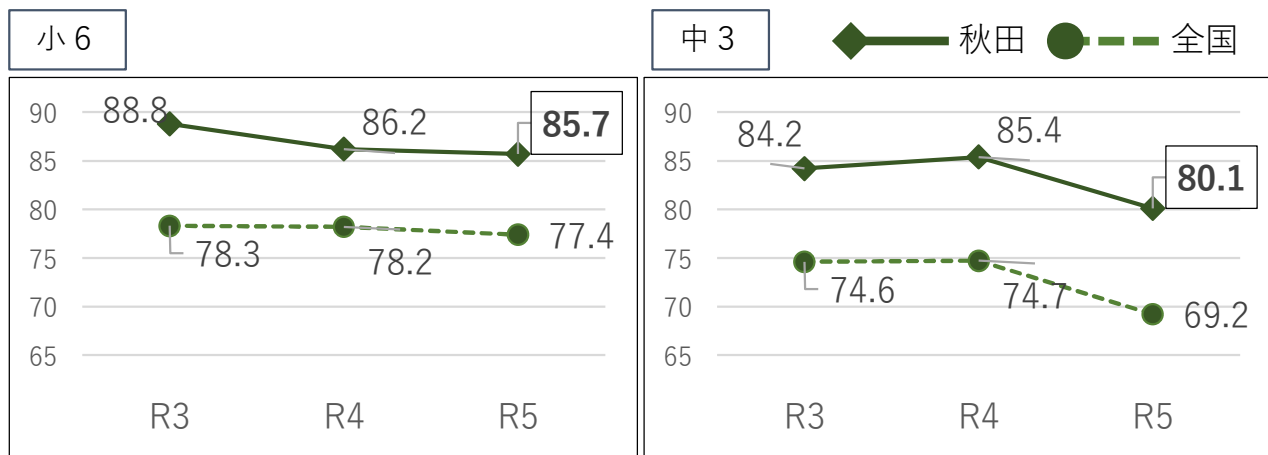
委員長 秋田大学大学院教育学研究科 教授 佐藤 学 氏

質問紙調査の結果、児童生徒の生活習慣や学習習慣、各学校における教育活動の取組は良好でした。児童生徒の学びに日々最善を尽くされてきた教職員の皆様に感謝申し上げます。

「学習の振り返り」に関する質問への肯定的な回答の割合が減少しています。

[児童生徒質問紙] 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている（「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合の合計）

経年比較
の結果



授業の終了後に振り返りは行われていますが、分かった点や理解できなかった点を再考し次の学習につなげられない児童生徒もいるようです。

デューイ（1916/1975）は経験を重視し、経験には試行錯誤的なものと、目的をもって行うものがあると述べています。多くの授業では、試行錯誤的な学習に陥らないよう、本時の目標に合致した「めあて」や「課題」を設定し、学習を進めることで、試行錯誤的な学びを防ぐようにしています。ただし、試行錯誤的なものが否定されるわけではありません。

児童生徒の様子を見ると、問題の答えを出すことに焦点が当たり、その表現が曖昧であっても、その解決が遠回りであっても見直そうとしない傾向があります。振り返りで重要なのは、どのように考え、どのように解決したのか、試行錯誤した局面に焦点を当てて、そこでの経験や得た知識のよさを見出すことです。そうした振り返りがあって、次の取組に活かすことができるのです。

人間は、新たな問題に接すると、それまで問題ないとしていた解決方法や考え方の不十分さに気付き、捉え直します。児童生徒には、新たな問題、新たな活動に取り組むことを通して、「振り返り」を行うことを勧めます。また、授業の終末だけでなく、他の場面でも行うことです。困難な場面は、非連続的で個々に異なり、解決すると忘れがちです。教師は、児童生徒が、困難な場面に直面した際や、解決の糸口を得た際の発言や表情を注意深く捉えて、「何か気付いたの？」「どのように考えたの？」と尋ね、解決の局面を振り返られるようにします。振り返りの方法も、文章で表現するだけでなく、他者に伝えたり、再度試したりするなど、児童生徒の発達や状況、効果の有無を考慮して、様々に工夫したいものです。そして、教師は、解決の局面における児童生徒の気付きを価値付け、次の問題解決にも役立てるよう支援することが重要です。

最後に、本稿のまとめです。

児童生徒の学習や活動に即した振り返りを促すよう支援を工夫しよう。

*Dewey、 J.（1975）. 「民主主義と教育(上)」. 岩波書店. （原著出版1916）

一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～

県教育委員会では、全国学力・学習状況調査の結果を基に、「安定した成果を示している学校」「課題の改善状況が顕著である学校」がもつ特長から、学力向上を支える関連因子を見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～」としてまとめてきました。各学校においては、この「5つのエッセンス」を、児童生徒の一層の学力向上に活用していただければ幸いです。

1 学校体制でPDCAサイクルを生かした共同研究

学校質問紙調査では、「全国調査の結果を県独自の学力調査の結果と併せて分析し、教育指導の改善を行っている」「全国調査の分析結果について、近隣等の小・中学校と成果や課題を共有している」などが全国の結果を上回っており、本県が提唱する全国学力・学習状況調査、秋田県学習状況調査、高校入試を一体と捉えた検証改善システムの充実が進んでいます。

2 子どもたちが安心して学習できる環境づくり

児童生徒質問紙調査では、「自分にはよいところがある」「先生は、自分のよいところを認めてくれている」「将来の夢や目標を持っている」などが全国の結果を上回っています。これは子どもたちが前向きで真摯な姿勢であることはもちろんですが、児童生徒のよさや可能性を積極的に評価して、自己有用感をもたせようと工夫を凝らしている本県の教師・学校のきめ細かで温かな学習環境づくりが生み出した結果です。

3 子どもたちの思考を促し深める探究型の授業づくり

本県では、児童生徒が問題を発見し話し合うなど、他者との関わりを通して、主体的に問題を解決する探究型授業が盛んです。児童生徒質問紙調査では、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」などが全国の結果を上回っています。今後は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向け、ICTを有効に活用しながら授業改善を進め、一人一人の児童生徒の学びの質を高めることが一層求められます。

4 自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に資質・能力を身に付けさせるためには、自発的な学習を促す指導の工夫が大切です。児童生徒質問紙調査では、「家で自分で計画を立てて勉強をしている」が全国の結果を上回っています。また、学校質問紙調査では、「家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えている」が全国の結果を上回っています。今後更なる学力向上を期して、家庭学習の充実に向けた指導、自ら「問い」をもつことができる子どもの育成に向けた指導、児童生徒が自らに合った学習の進め方を考えることができる指導などに、全校体制で組織的・継続的に取り組むことが求められます。

5 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

学校・家庭・地域等のオール秋田でつくってきたすばらしい教育環境が、本県の教育の強みです。子どもたちの授業への姿勢、家庭学習の充実なども、それと関わりがあります。本県では、学校から家庭や地域への働き掛け・呼び掛けが特に丁寧に行われており、学校・家庭・地域の豊かな連携を生み出しています。

令和5年度
全国学力・学習状況調査の
活用に係る検証改善委員会

委員一覧

※敬称略

職名は令和5年11月現在

佐藤	学	秋田大学大学院教育学研究科教授
佐々木	雅子	秋田大学教育文化学部教授
高橋	茉由	秋田大学教育文化学部講師
稲畑	航平	義務教育課長
長門	亮	義務教育課チームリーダー
長崎	美由紀	義務教育課副主幹
須合	真紀子	北教育事務所指導主事
相馬	真紀子	中央教育事務所指導主事
熊谷	亜希子	中央教育事務所由利出張所指導主事
小田	長早	苗南教育事務所指導主事
佐藤	和歌子	南教育事務所雄勝出張所指導主事
八田	浩彦	義務教育課指導主事
煤賀	卓也	義務教育課指導主事
真崎	敦史	義務教育課指導主事
望月	直哉	義務教育課指導主事
矢吹	敦	義務教育課指導主事
吉田	茂樹	義務教育課指導主事